

4 座談会

(釜石市派遣職員)

座 談 会



■ 釜石市に派遣されていた職員による座談会

- | | |
|-----------------------|----------------|
| ① 北九州市・釜石デスク | 東 義 浩 (土木) |
| ② 釜石市建設部都市計画課付係長 | 上 村 周 二 (土木) |
| ③ 釜石市復興推進本部都市整備推進室付係長 | 森 田 健 (土木) |
| ④ 釜石市復興推進本部都市整備推進室主査 | 大 庭 成 道 (土木) |
| ⑤ 釜石市復興推進本部都市整備推進室主任 | 原 田 一 臣 (土木) |
| ⑥ 釜石市復興推進本部都市整備推進室主任 | 入 口 雅 洋 (事務) |
| ⑦ 釜石市産業振興部水産農林課主査 | 末 永 芳 治 (土木) |
| ⑧ 釜石市産業振興部水産農林課主任 | 小 野 彰 次 郎 (土木) |
| ⑨ 釜石市保健福祉部健康推進課 | 河 津 博 美 (保健師) |
| ⑩ 釜石市水道事業所工務係 | 加 藤 忠 (土木) |

■ 震災支援本部

- | | |
|----------------|--------------|
| 東日本大震災支援対策担当課長 | 上 村 鋭 治 (司会) |
|----------------|--------------|

座談会～釜石市派遣を通して～

座談会収録日：平成 25 年 2 月 27 日

会場：ホテルサンルート釜石・会議室

上村（司会）：

皆さんは、昨年度からもしくは本年 4 月から長期間にわたり、釜石市で復興業務に携わっています。慣れない環境で苦勞もあると思いますが、釜石市の職員として、住民説明や計画づくりなど様々な業務で活躍されています。

本日は、この 1 年間を振り返って、様々な点についてディスカッションしたいと思います。宜しくお願いします。

まずは皆さんが担当している業務について、ご紹介ください。



（上村課長）

—— 担当業務の紹介 ——

森田：

都市整備推進室で、漁業集落の担当をしています、森田です。

私の担当業務は漁村部の復興まちづくりで、現在、15 地区ある漁村のまちづくり計画や土地利用計画の策定を行っています。具体的には、復興事業である、防災集団移転促進事業と漁業集落防災機能強化事業を使って計画を進めている状況です。



（森田係長）

入口：

都市整備推進室の入口です。業務は用地買収です。都市部の区画整理事業、漁村部の防災集団移転促進事業などに係る用地買収を担当しています。

小野：

水産農林課の小野です。

担当業務は、市が管理する 9 漁港の一つ白浜（釜石）漁港の災害復旧工事等を担当しています。具体的には、設計・積算・工事監督など一連の業務を行っています。

末永：

同じく水産農林課の末永です。

業務内容は小野さんと同じで、漁港の災害復旧に係る業務を担当しています。

9漁港のうち、私は1番南の大石漁港の災害復旧を担当しています。



(末永主任)

加藤：

水道事業所の加藤です。

主たる担当業務は、水道施設の災害復旧の設計と監督です。また、老朽化した水道管の入れ替え工事の設計・監督、水道施設の維持管理も担当しています。

原田：

都市整備推進室の原田です。

担当業務は、主に漁村、漁業集落の復旧・復興事業で、被災した人が新しく住む移転先の住宅団地の設計や、浸水した跡地の利用計画などです。

東：

釜石デスクの東です。

私の仕事は大きく二つに分かれていて、一つはここにいる皆さんが、釜石市で十分に力が発揮できるようバックアップすることです。

もう一つは、釜石市の復興基本計画に謳われているスマートコミュニティの導入など、復興に関する技術的アドバイスなどのお手伝いです。



(東課長)

河津：

健康推進課の所属で、平田地区生活応援センターに配置されている保健師の河津です。業務は、心のケア全般と、生活習慣病や乳幼児健診、予防接種など、保健師業務全般です。

大庭：

復興推進本部都市整備推進室で、被災市街地復興土地区画整理事業と津波復興拠点整備事業を担当している大庭です。

上村：

建設部都市計画課の上村です。担当は、都市計画事業に係る計画から工事実施までが業務になります。さらに、景観政策も所管しています。

まず、都市計画事業に関することですが、計画策定では、国や県と調整しながら計画を作り、都市計画決定にかかる手続きや都市計画審議会の運営を行っています。

それから、事業の実施では、例えば公園や都市計画道路の整備を行っています。

また、都市計画ではいろいろな許認可がありますが、開発行為に係る許認可、都市計画法に基づく建築工事に関する許認可なども行っています。

最後に景観に関してですが、現在、橋野高炉跡地の世界遺産登録に向けていろいろと挑戦していますが、それに関し、都市計画課で、景観の保全を図るべきという立場から、景観計画の策定を行っています。



(上村係長)

——被災地及び被災者に対する思い——

上村（司会）：

ありがとうございました。では、ここからは意見交換に移りたいと思います。

まずは、1000年に一度と言われる大震災の被災地に着任した当初のことをお話ください。釜石の地に降り立った時の印象や、被災者と触れ合って感じたことなど、被災地及び被災者に対する率直な思いなどお願いします。



入口：

着任したときの感想は、津波の被害を受けた場所と受けていない場所の差がすごいということです。津波の被害を受けていない西部地区までは普通の街並みで、普通の生活が継続されているにも関わらず、津波の被害を受けた場所は、建物もないし、人通りもなく、電気も通っていない所がありました。本当に想像を絶するというか、言葉が出ないというようなものを目の当たりにして、やはり映像だけでは分からない、すごい被害があったのだなと実感しました。

東：

私は、震災から5カ月たって現地に入りましたが、まだ現場にはいろいろなものが散乱している時期で、赴任直後に被災地を北から南まで見て回りましたが、それぞれの地域で被災している状況が違っていました。

釜石に関して言えば、特に町中の東部地区と言われるエリアは、残っている家と破壊された家が混在しているため、まちづくりの上では、非常に厳しい状況になるだろうと思

っていましたが、案の定、今でもいろいろな考え方を持っている方の意見統一が難しい状況です。

それから、被災者への対応といいますか、当初は、どうしていいか正直分かりませんでした。誰が被災しているのか、誰が被災していないのかが分からず、また、職員に対しても、震災のことを話していいのかが分からず、非常に気を使った記憶があります。徐々におつき合いが深まってきて、どなたが被害に遭われたかが分かってきましたが、その辺は非常に苦心したところです。



(東課長)

小野：

皆さんが言われているとおり、初めて見た時には、言葉が出ない感じで、特に漁港は地盤沈下が激しく、海面と土地の境が分からないような状態で、早く復旧のお手伝いできればいいなという思いで頑張ってきました。

——復興全般について——

上村（司会）：

ありがとうございました。次に被災地の復興全般についてお話をいただこうと思います。

まずは、それぞれの担当業務を通して見た復興の進捗状況についてお聞かせください。

原田：

進捗状況は、少しずつ進んでいますが、なかなかそれが被災者の目に見えて伝わりにくいので、そこをうまく伝えて住民の不安を無くすようにしなければと感じています。

もう少しすれば、目に見えてきそうなのですが。

上村（司会）：

伝わりづらいというのは、現場サイドで動きがないということですか？

原田：

現在、測量や用地の関係を進めている段階で、土地を扱っている訳でもなく、道路が修復されている訳でもないという感じです。説明会もそんなに頻繁にできていないので、その間が空くと、何をやっているのだということになります。



（原田さん）

末永：

漁港の整備では、災害復旧と防潮堤の再整備の二つの事業をやっていますが、5 ヶ年計画ということで現地での工事を進めています。一部の漁港では、今年度末には一部施設が使えるようになり、ここは形が少し見えてきていると感じます。

進捗状況ですが、漁港については、概ね今のペースでいけば計画どおりにいけるかなと思っています。

ただ、もう一つの防潮堤については、これはまちづくりとの兼ね合いもあり、かつ、土地を買ったり、権利者との交渉が必要なので、まちづくりの部署や復興推進の部署とも協力しながら事業を進めています。こちらについては、この先どのように進むのか、今の段階では見えてこない状況です。

加藤：

水道の復旧に関して言えば、人が住んでいる所はほぼ完了している状況です。復興については、区画整理、道路が仕上がらないと、水道の工事はできません。人口の移動などもあるので、それに合わせてこれから計画することになります。

上村（司会）：

復興の絵が描けてからということですね。

加藤：

そうです。

河津： 被災直後から避難所での健康管理、その後は仮設団地での孤独死の予防など主に被災者を対象とした保健活動をずっとやってきました。それが被災して



（河津さん）

からもうすぐ2年ということで、被災者だけではなく、他の被災していない住民に対しても、通常の保健サービスの提供ができるように進めています。今年度の半ばぐらいから、被災者対象とか仮設団地対象ではなく、在宅など広く釜石市の住民全体を対象に保健事業を展開しています。

そのほか、釜石市では、現在、数多くの派遣職員が手伝っている状況ですので、そういう人たちがいなくなったと後のことも踏まえ、保健業務をもとの姿に戻していこうという動きがあります。

上村（司会）：

ありがとうございました。次に、震災から2年が経過するなかで、一般的には復興が遅れていると言われていています。野田市長も北九州市に来られた際、去年は思うように復興が進まなかったと言われていました。

復興が遅れている要因はいろいろあると思いますが、現場にいる立場として、こういったことが挙げられますか。

森田：

復興が遅れていると新聞等で報道されていますが、業務的に外部から見えないような用地処理、計画策定、デスクワークがこの1年はかなり多かったと言えます。一步ずつではありますが、私たちの業務は進んでいると思っています。

そのなかで、用地に関しては権利を制限するものもありますので、権利者との調整に時間がかかっていることもあります。

それから、国から復興交付金として、1次から4次まで配分を受けていますが、お金をもらっても制度が固まっておらず、動けない状況もあります。

上村（司会）：

国が、平常時のルールを適用させようとするので復興が進まないとも言われていますが、それはいかがですか。

森田：

事業的に、当初は平常時の適用を求められたりもしましたが、徐々に緩和されています。しかしながら、用地などは権利関係が絡んでおり、それを全事業で緩和適用するというのは、国として難しいということもあります。それでも今、法改正が進まない中で、上手に解釈しながら進めている場合があります。

上村（司会）：

現場としては、平常時のルールを適用するのもやむを得ないと思うこともあるということですか？

森田：

やむを得ないというか、なかなかそこは簡単には変えられないのだろうなというところもあります。

末永：

復興は遅れていると言われていますが、数字だけが独り歩きしているような気がします。いくら予算を使ったから進んでいるという形で報道されるのはどうなのかなと思います。最近思うのは、数字にとらわれすぎて、無理して工事発注を行う状況も見受けられます。工事の調整前は手間が非常にかかるので、遅れているのを、ただ単に数字だけで判断して欲しくないと思います。



高台の寺院から望む

実際に、先ほどもありましたが、目に見えないところでは、皆がんばって仕事しています。

東：

総論を言えば、丁寧な街づくりを心がけていることが、遅れていると言われてしている原因の一つです。と言うのも、このような事態ですから、役所が強権的に「こういう施設をどんどん作る」「こういうふうに復興計画を進めていく」と言えば、速いのかも知れません。しかしながら、住民の声を聞きながら進めることを、釜石市長も常々思われているようで、事前調整に時間がかかっているのが事実だと思います。

それから、平常のルールをそのまま使うということの例えとして、不動産鑑定については、被災した後での鑑定を行っており、そういったことに時間がかかっているということはありません。そこは平常時のルールを変えて、例えば被災前の商取引の地価などを参考にして、土地の価格を決めてしまうようにすれば、多分、何ヶ月間かは時間が稼げたのかなと思っています。

上村（司会）：

少しずつは緩和されているのですか？

東：

既にタイミングを逸しているので、今の段階ではなかなかできないと思います。今後同じような災害があった時も、今回が標準になって、同じようなことが行われるかもしれませんが、その時の政権が頑張って特例措置としてやるのだと決めてしまえば、本当は簡単なことではないかと思っています。

当然、その際には法整備なども必要になってきますが。

上村（司会）：

その他、報道では、用地や、資材、人が足りないことが、遅れている要因と指摘されています。

入口：

用地が足りないことについては、釜石の特性かもしれませんが、平地が少ない、急な山がある、しかも岩の山であるため、切りくずして高台に移転先を作るのに、お金も期間もかかってしまうということが言えます。そこで、被災箇所を盛土して作っていくという事業にならざるを得ないわけで、そういうところで計画の策定、住民の意見を反映させながら作っていくというところに時間がかかっているということが言えます。



（入口さん）

小野：

釜石市は今年度の発注が早かったので、下請け確保や当初の資材確保がうまくいき、当初は順調に進んでいました。しかしながら、途中から生コンの価格が高騰したり、ほかの材料も高騰して、金銭的な折り合いが付かなくなってきました。

具体的な話をすると、クレーンが釜石管内にはなく、結果的に持ってきたのは日本海側の秋田からだったとか、この他、潜水士さんの手配はできたけど、九州の佐賀県とか沖縄県から連れて来たということもあります。

今年度は、3月末でどの工事も完了を迎えることができますが、来年度は、業者が県や他市町村の工事もしているので、現場代理人の数が不足してくる恐れがあります。入札しても応札しない業者が出てくるという情報があります。



（小野さん）

加藤：

水道工事を担当していると、人手不足というのは否めなくて、地元の下請けが居なくて、静岡から来ています。また、配水池の工事では、資材を確保する上で時間がかかっているということを聞いています。

上村（司会）：

コストは上がっているのですか。

小野：

生コンクリートで言えば、約2割から3割上昇しています。また潜水士の価格は倍以上に跳ね上がっています。さらに、遠くから連れて来ますので、作業員の宿泊地の確保も、釜石管内での収容能力を超えており、家を1軒丸ごと買い上げてそこに住んでもらうとか、廃止された旅館を業者が買い取って改装するなどの方法をとっていますので、かなり経費がかかっている状況です。

上村（司会）：

そういうことがあり入札不調になると？

小野：

そうですね。役所が設定する内容では対応できないところがたくさんあり、コストがかかりすぎて、折り合いが付かないというのはあります。釜石の漁港工事ではなかったのですが、大船渡、宮古等では、かなり入札不調が出ているようです。



浸水する護岸（浜町、大型船の乗揚げ場所）

上村（司会）：

部屋の確保というのは、役所が積算する際、見込んだりするのですか。

森田：

しないです。離島であればできますが。

小野：

被災地特例として国の制度はありますが、基本的にはそこまで含めることができない制度になっています。下請けのその下、2次下請け以降からは日雇等で雇ってきた労働者の宿泊費等の手当ては経費として含めることができますが、元請けと一次下請けの場合、費用を含めることができない制度になっています。制度が微妙なところですよ。

末永：

単価ですが、労務費は、労務調査というのがあって、各整備局において、工事で使った労務員の賃金を調べて、価格を決定しています。被災3県については、去年少し早い時期に労務費の調査があったのですが、単価はほとんど上がっていません。

落札価格は高くなっているのですが、作業員の賃金にどの程度反映されているかは分かりません。こういう状況なので、来年以降も労務単価は上がるかどうか分かりません。実際の作業員の手取りが増えるということになれば良いのですが…。

森田：

調査の仕方も違う。

末永：

諸経費が想定以上にたくさんかかっているの、そのあたりは国も見直しをして進めていただきたいと思います。

また、仙台などの都会の方になると仕事がたくさんあるので、業者が仕事を選んで取っているという状況が見受けられます。釜石も今後、発注本数が増えてくると、多分、業者が仕事を選んで取ってくることになり、そうなる入札不調ということは出てくるのかなと思います。

上村（司会）：

釜石でまだそれ程不調になっていないのですか？

末永：

漁港関係は出ていませんが、建築工事は不調がずっと出ているようです。

東：

県の工事は結構不調が出るみたいです。特に沿岸部の工事は。

末永：

これは業者に聞いたのですが、今は基本的に地場の業者に発注する形態をとっていますので、地元の業者もなるべく復興には協力したいと考えています。ですが、赤字を出してまでは付き合いきれないので、積算に当たっていろいろと考慮していただきたいという要望を受けました。

上村（司会）：

その他、復興が遅れている要因はありませんか。

原田：

市役所に用地経験者が少ない。

入口：

用地確保が進まない要因はいくつかあります。

まずは所有権の問題です。相続関係が発生しているケースが多いのですが、明治時代の名義のままです。相続人を追えなかったり、そもそも所有権登記自体なされておらず、真の所有者が分からなかった

り、もしくは護岸地などで所有者が分からないという問題があります。

次に物件です。抵当権などが設定されていますが、これを解除するのが難しいということがあります。

また、所有者の土地への思いが強く、先祖代々の土地なので、いくら復興とは言え協力できないという方や、自分はこの土地で再建したいので売らないという方もいます。こういう所を除いて買収を進めていくと、まとまった用地が確保できません。

さらに、市役所の用地経験者が足りないという点です。今後、計画が定まってきて本格的に用地買収が始まりますが、現在、用地業務を担当する部署にも経験者は2名だけで、その2名も小規模な用地買収の経験しかありません。

さらに、昨年10月10日、復興推進本部内に用地調整室ができましたが、室長以下、釜石市の職員は、用地経験ゼロの方たちが配属されています。また、4月以降も岩手県の任期付きの職員が増員になるのではないかと話を聞いていますが、おそらくこの方たちも用地の経験がないのではないかと思います。

そういった場合、まず、用地の業務を知ってもらうことが必要です。さらに、任期付職員であれば、市の仕事自体を経験していない方もいるでしょうから、市役所の仕組みやルールそういったことから覚えていかなければなりませんので、即戦力ということではなかなか難しいと思います。

今後、用地買収が本格化しますが、スタート時はかなり厳しいのではないかとこの感があります。

大庭：

復興を担当する釜石市の職員の数が少なすぎます。

また、様々な専門家から提言や意見が寄せられますが、この対応に職員がかなり時間を割かれています。

東：

気の毒な面もあります。先程の用地の話ですが、釜石市の職員は約400人で、用地の経験をしている人はそもそも数名しかいないのです。そういう人たちは、別の用地経験を必要とされるセクションに張り付けられたりしていて、人員配置に余裕がない状況です。



(大庭さん)

上村（司会）：

ありがとうございました。次のテーマに進みます。次は、復興に向けての今後の見通しや、復興を進める上でのポイントなどお聞かせください。

入口：

先程と同じような内容になりますが、計画が固まっていよいよ用地買収ということになりますが、

所有権であったり、物件であったり、地権者の事情であったり、なかなか買収が一気に進むと言うわけにはいきません。

また、本人に売る意思があっても、財産権などの諸問題を解決するのに、手続きを省略して解決できるようにするというのは、国でもなかなかできないと思います。

結局、通常の流れでやるしかないなので、そうなってくると何年もかかってしまうということになりますが、今のところそれはどうしようもありませんので、地道につぶしていくしかないという状況です。

東：

復興基本計画では10年で復興を完了するということになっていますが、このままの状況であれば、かなり厳しい状況だと思います。阪神でさえ17年経ってようやく完了のようなことを言っている状況なのです。

復興を早く進めるに当たっては、復興住宅をまずは何とか一つ建てて、それを皮切りにドミノ的に空いた土地に住宅を建てるという流れができればと思います。

——支援業務について——

上村（司会）：

テーマを変えたいと思います。

支援業務について、皆さんが仕事をする上で、体験したこと、感じていることなどをお話したいと思います。

皆さんの釜石での経験は、北九州市では経験できないことも多いのではないかと思います。まずは、釜石で仕事を行う上で、苦労していることなどお話しください。



北国ならではの仮設住宅（玄関は風除室付）

大庭：

道路を作る場合、反対者がいればそこに無理して道路を作らず、ルートを変えるということがあるようです。釜石市では、職員が地元の方と近い、場合によっては親戚関係などということもあり、利点もある半面、なかなか地元の方が反対する事業をやれないという現実もあるようです。

上村（司会）：

確かに、知り合いが、親戚という場合も多いでしょうね。

小野：

苦労と言うまでではありませんが、調整等で漁師の方と話しをする際、方言で言葉がほとんど分からないというのがあります。釜石市の職員から通訳してもらっている状況です。

また、小さい漁村の集落では、ほとんどの方が同じ苗字ですね。屋号というのが存在するのですが、何とかの誰それと言われますが、そこらあたりは理解不能です。

入口：

地域の方が一つにまとまって復興に取り組んでももらえればいいのですが、被災している人と被災していない人との温度差を感じることがあります。土地の協力や地域をまとめるなどの面で、苦労が絶えません。そういうところに親族同士の様々なことが絡んできて、スムーズにいかないということがあります。

原田：

土地の値段が安いですね。山は1㎡1000円です。交渉の際に、土地の単価が低いというところで苦労しています。地元住民はまだしも、相続して本人が関東にいたりすると、自分の住む関東の土地の単価と釜石の土地の単価を比べ、なんじゃそれはということがあります。実際に本人はずっとそちらに住んでいるので、釜石のことは分からなかったりするわけです。そうすると、あまりに価格がかけ離れていて、話にならないということも聞きます。

上村（司会）：

それは制度云々というより、釜石の土地の値段が低すぎるということですね。

原田：

現実を認識してもらおうということから始めるわけですが、なかなかそれを認識していただけないということですね。

上村（司会）：

よくわかりました。では、次に行きます。次に、達成感を感じたり、うれしかったこと、良かったことなどがあれば、お話いただければと思います。

東：

苦労とは多少違いますが、私は派遣職員のマネジメントの仕事もあるので、皆さんが元気で居るだろうかということが心配になりますね。

一方、非常にスキルの高い職員ばかり送り込んでくれているので、どこに行ってもお誉めの言葉を頂きます。そのときは、北九州市の職員として、非常に誇りに思います。さらに言えば、皆さん、も

っと長い期間居てくれないだろうかという話をいろいろなところで聞きます。非常に嬉しいことです。

小野：

ちょうど今が工期末を迎えるということもありますが、70cm、80cm 地盤沈下した箇所がかさ上げされたところを見れば、少しずつですが復興は進んでいるのだという感じはあります。

上村：

嬉しかったこととして、私のところにいろいろな人が相談に来るといことがあります。全然知らない人が何かあれば私に相談に来ます。分からないことがあれば上村のところに聞いて来いと言われて、私のところに来るようです。非常に信頼されているのだなと感じます。

上村（司会）：

では、次に、仕事の進め方や住民対応などで、両市の違いを感じることはないでしょうか。

入口：

約2・3カ月に1回、住民説明会を行います。受付で名前を書いてもらったりするので、結構列ができますが、こちらの人は静かに待ちます。会議が始まる前の段階で騒がしくなることもなく、釜石では皆さん静かに待っていて、受付が進みます。これは全然違うなと思いました。西日本地域からの派遣職員の統一見解です。

河津：

私が最初の頃に思ったのは、保健指導などは良く話を聞いてくれない住民も多いのですが、こちらの方は素直で、同じことを同じように言っても、一生懸命聞いてくださって、実行しようと努力してくださいます。保健指導などは住民に対して非常にやりやすいと感じます。

また、北九州市では、まず仕事に優先順位をつけて、重症にものや、効果的、効率的なものからやっていくという方法をとっていますが、釜石市は優先順位を付けずに100%全てやるという考え方のような気がします。

住民の人口の割に保健師がとても多い為、優先順位をつけなくても問題なかったのだと思います。



(河津さん)

森田：

私も地元に入りますが、皆さん、優しいと感じます。ですが、優しいということで、話を聞いてい

るのかなと思ったら、全然聞いてなかったということあります。

それから、職場におけるマスコミ対応は、釜石でも課長以上が行うなどのルールがあるのですが、被災時の混乱期から、職員でも電話を取った人が全て答えるということがありますね。

上村（司会）：

釜石市は本市に比べ職員の数が少なく、一人の職員の担当業務が広いですよ。大変だと思うことありませんか？

末永：

北九州市では、一連の工事で、予算をとって来る部署、計画をする部署、設計する部署、工事監督をする部署等に分かれています。ここでは一つの課で全てやります。従って、一人一人のスキルが高くないと計画から工事、維持管理まで全てできません。一人一人のスキルとしては高いと思います。

それから、職員が親切です。先日も、住民対応で、県の業務に対する苦情が釜石市役所に寄せられ、それに対応した職員の話ですが、「県に電話してください」と言わずに、自分が県に行って対応していました。結構そういうところが多いのかなと思います。

加藤：

北九州では、水道の仕事の分担が細かく分かれており、私は配水管の工事担当でした。一方、釜石では施設の維持管理、給水の受付や検査、また配水管の設計監督などいろいろな仕事が回ってきて、しかもどれも対応しなければいけないという状況です

上村（司会）：

そういう違いは、仕事の進め方としてどちらが良いと思いますか。

大庭：

私の職場には釜石市の職員が二人いますが、もし、どちらかが仕事をしない職員だったら業務の遂行がかなり困難になります。北九州みたいに組織が機能して分担があれば、その人がいなくても何とかかなることになります。

加藤：

水道の施設が山の中腹にあったりすると、危険なところを通ったり、熊が出そうだったり、そういった所に一人で行くこともあるそうです。しかしながら、そういったこともしなければいけないというのが、釜石の現状かなとは思っています。

小野：

個人で持っている業務量が多くて、組織で仕事をするよりも個人で1から10までを完全にやりあげるイメージが強いです。その人が休みになれば、まるっきりわからないような状況も多々ありました。

北九州の場合、担当者が休みだとしても係長等が把握していれば、仕事は回るイメージがありましたが、ここでは、係長も担当者とは別の仕事を持っており、係の中でも個人個人が違う仕事をしているような印象を受けました。

上村（司会）：

その辺は、釜石市に限らず、我々が政令指定都市ということで、特別なのかも知れませんね。一般市であればそちらの方が普通なのかもしれません。

入口：

復興推進本部が、出来て間もない新しい部署だからかもしれませんが、決裁を回すのに紆余曲折を経ることがあります。

例えば、用地室で何らかの起案をすると、この件だったらこの人が詳しいから、そっちにも回しておけというような、本来のラインではないようなところまで、決裁が紆余曲折を経て回るところがあります。これに時間がかかって困っているところもあります。

新しくできた部署なので、ルートというか、そういうところもしっかりしておらず、情報を持っている人のところに回しておけということがあり、なかなか難しいところがあります。

上村（司会）：

組織というよりは「人」の色が強い感じがしますね。

——職員派遣について——

上村（司会）：

次に、テーマを変えて、自治体の職員が他の自治体に派遣される職員派遣についてお話いただきたいと思います。

釜石をはじめ、被災地では職員不足を補うために、他の自治体からの派遣職員を多数受け入れています。まずは、派遣職員で被災地の人員不足を補っている現状について、考えや感想などがあればお聞かせください。

原田：

中には派遣期間3カ月という自治体もありますが、この期間が短いと地元の人にとって対応に困ることもありますし、後から引き継いだ人も何が何だか分からないまま終わってしまうということもあります。本市は1年の間派遣していますが、どこの自治体もそれくらいは居て欲しいなと思います。



原田さん

入口：

復興推進本部は半分以上を派遣職員で補っている状況です。被災地の復興ということですので、いちばんメインの職場になっているはずです。

派遣職員は、3ヶ月、6カ月、1年などの期間で入れ替わりますので、できるだけ多くの釜石市の職員が復興を担当する職場にいて、その代わり、復旧業務の部署に派遣職員がいた方が良いと思います。釜石市の職員が、長期的な復興のビジョンなどにもっと携わるべきだと思います。

上村（司会）：

釜石市の職員から、そういう声は挙がらないのですか。

入口：

派遣職員の間ではそういう話を口にしますが、現状では、復興関連以外のそれぞれの課も継続的な仕事をしているので、優秀な人材が抜けると困るということで、なかなか出せずに、釜石市の職員が復興の職場に増えていないのが現状のようです。

末永：

同様に、いわゆる街づくりについては地元の方が中心になってやるべきなのかなと思います。一方、市役所の仕事というのは、どこの町でも同じような業務がありますので、そういった業務を派遣職員がお手伝いする形をとれば、期間が3カ月でも経験のある方が来れば、期間の長さには関係なく支援ができると思います。

今は、復興本部の半分以上が派遣職員です。その方たちが最前線に立って街づくりをやっていることには、正直、違和感を感じています。

実際に、私の職場でも復興推進本部は釜石の人が配属されるべきだよな、という声は出ています。

森田：

今話しに出たように、職場の配置のバランスのことが一つと、その他、私は当初、区画整理経験者としてこちらに赴任しましたが、区画整理を行うことなく1年半が終わろうとしています。そういう

ところは、上手に配属してくれればよかったと思います。他にもそういう使われ方が見られるので、もったいない配置をしているのかなというところがあります。

大庭：

私も区画整理を経験することなく、区画整理で赴任して1年になります。釜石市が欲しい派遣職員としては、第一線で働く経験豊かな人が理想でしょう。しかしこの自治体も人員減で余裕がなく、派遣に苦勞しているようです。そこに派遣元と派遣先のギャップがあります。

上村（司会）：

先に進めます。そういうなかで、釜石デスクを中心とした10人の派遣というスタイルは、日経ビジネスで「すごい組織100」に選ばれるなど、全国的にもユニークなものとされています。当事者の皆さんからみて、北九州市の派遣スタイルはどう思いますか。いろいろな声を聞くとと思いますが、いかがでしょう。

河津：

いろいろな自治体の方から、北九州市はチームワークが良く、仲が良いねと言われます。

派遣職員は被災地に来るとのこと自体でストレスが溜まると思います。しかも、北九州市と釜石市では、気候の状態から違うわけで、普通に生活するだけでもストレスが溜まります。なまりがあっても言葉も通じない方々との新しい人間関係のなかで新しい仕事をしなければならないということで、本当にストレスが溜まりますので、定期的に北九州市の職員で集ってストレス解消しています。このことは同じ故郷の人同士で、定期的に様々な話が出来て心強かったし、何かあれば助けてもらえるという安心感があり良かったと思います。

上村（司会）：

月に一度集まっているのですよね？

東：

事務改善会議ということで集まっています。不定期ではありますが。

それから、北九州市から視察などがある場合に、皆で歓迎することもできます。

森田：

私は皆さんより半年早く来て、その時は2、3人という少人数でしたが、やはり10人になると心強くて活動しやすいですね。



東課長

それから、釜石デスクを通して、どのような職員に来て欲しいのかというニーズを調べた上で派遣しているの、かなり信頼もあって動きやすい状況にあります。そういうところも、私たちは救われているのかなと思います。

北九州に一時帰郷するときのルールなども、他の自治体の中には北九州を参考にしたところもあるようです。

また、震度4以上の地震の時には出身自治体から派遣職員に連絡が入りますが、一切連絡が来ない、安否の確認も無いという自治体も中にはあります。北九州市では、家族にも連絡を入れていただき、またフォローもしていただいているので、かなり助かって業務に集中出来ています。

上村（司会）：

私たち送り元としても、10人まとまっているので、そこは本当に安心です。一人だけ派遣するのは断然違うと思います。

では、先に進みます。全国から被災地に職員が派遣されておりますが、残念ながら派遣職員が自殺したというニュースもありました。派遣職員にとって被災地での業務は、慣れない土地での仕事や生活など、ストレスが生じやすいものだと思います。そこで、皆さんがストレスへの対処やメンタルケアで気をつけていることなどあればご紹介ください。

上村：

仕事面であるべくストレスを溜めないようにするという点では、あまり自分で仕事を抱えこまないということに気を配っています。私は、いろいろな仕事の指示を受けると、その日のうちに返すということを心がけています。

その他、私生活に関しては、ストレス発散のために行動的に動き回るとするのが重要と思っていますので、そういうところに気を遣いながら、休みの日は行動しています。

原田：

やはり職場の人間関係が大事だと思うので、皆と仲良くなるように、飲みニケーションなどで仲の良い人を増やすということを心がけています。復興本部は派遣職員が多いのですが、それはそれで仲良くやっているのかなと思うので、その辺が心強いです。

加藤：

私の場合、北九州でやってきた仕事の内容と異なるものについては、隣の席の方に聞くことにしています。そのようにして徐々に仲良くなったり、話をするようになったり、飲みにいったり、そういうことでストレスの解消を図っています。



(加藤さん)

上村（司会）：

休みの日などは、どういう過ごし方をしていますか？

小野：

私は東北が初めてだったので、時間があれば東北各地の観光地巡りをしています。

入口：

復興の仕事はやろうと思えば 24 時間 365 日仕事がありますが、なるべく土日は休むとか、残業しない日を作るとか、遊ぶ日を作るとか、そういうことでメリハリをつけるのが一番良いのではないかと思います。

日程が合えば、皆さんとどこかに遊びに行く、飲みに行くというのが一番良いストレス発散、メンタルケアになっているのではないかと思います。

また、こちらに来てバイクを買いました。夏の期間はいろいろなところに行きましたが、11 月に入って早々に雪のシーズンになってしまって、バイクは休眠中で冬はいろいろなところに行けません。

東：

このメンバーに保健師がいるというのは、非常に大きな意味があります。薬をもらって病気が治るということもあるようで、そういう意味ではメンタル的に厳しい時に、保健師がいると言うのは、マネジメントする者としては心強い限りです。

それから、それぞれ空いているときは、せっかく東北にいるのだから、いろいろなものを見てみようという好奇心旺盛な人たちが多いことも安心できることです。

上村（司会）：

では、次に行きます。全国の多くの自治体では、仕事は増える一方で職員が減っている状況ではないかと思います。日頃からギリギリの体制の自治体が、災害などのアクシデントに見舞われると、まさに今の被災地がそうですが、当然、その対応にあたる職員が足りないということになります。

今後も自治体における職員数が大幅に増加するということは考えにくく、今回のような緊急時における自治体間の職員派遣のニーズは、本市は今年の九州豪雨で八女市ときは市にも職員を派遣していますが、増えるのではないかと考えています。

そこで今回の経験を通じて、職員派遣の方法について、意見や提案などあれば、お聞かせください。



（上村課長）

森田：

先ほどの話と重複する所もありますが、北九州市は釜石市に特化していますが、他の自治体では一人だけの派遣ということがあります。何かあれば助け合いもできるし、こうやって集まって話もできるということで、やはりまとめて派遣していただければと思います。国からの要望や各被災地の要望に応じてばらばらに出すより、ある程度まとまって特化して応援した方が良いと思います。

東：

今回は、全国的に派遣ルールがない中で遠い所まで来ていますが、地方ブロック毎に手厚い支援体制をとる必要があると思います。簡単に言えば、東北エリアであれば東北エリアの市町村が大きく手を貸すようにするという事です。ここまで来るのに1日かかる距離は大きな障害だと思うので、そういう制度を整えるべきだと感じました。

入口：

派遣されている自治体によって、派遣期間が3カ月、半年、1年とありますが、どのタイミングであっても4月に全てが入れ替わることになるので、そこをずらせるような派遣の方法ができればと思います。現在の復興本部では、半分程度の職員が入れ替わる可能性があります。そうなってくると、また1カ月、2カ月仕事が遅くなる可能性もありますので、できれば4月に全て変わるようなことがないように、ずらせることができれば良いと思います。

上村（司会）：

そこは、被災地から見るとそのとおりですが、送り元の事情としては難しいですね。それぞれの自治体の異動時期は通常4月ですから。

私はこの3.11と去年の九州豪雨の業務で、被災地の窓口の方と何度も話をしましたが、被害が甚大であるため、応援がないととても無理だと感じました。

例えば、ある九州豪雨の被災市は、平常時、公共土木の職員が数人しかいないとのことでした。これでは被災箇所が多すぎてとても対応は無理です。であれば職員を採用すれば良いのですが、何年かすれば平常時に戻るのでそれも難しい。そう考えると、今回のような応援はこれから増えていくと思います。これまでであれば、公共工事も沢山ありましたが、公共工事もどんどん減っており、職員も減っているのですよね。

先ほど話があった、最前線の業務は地元の人が行い、誰でもできるような業務を派遣職員が担うというのは確かにそうかなと思います。

では、テーマを変えたいと思います。次に生活面についてお話を聞かせて頂きます。皆さん、釜石で長期間生活するのは初めてだったと思いますが、仮設住宅での生活や家事全般について、この1年を振り返って、感想など聞かせてください

——生活面について——

原田：

仮設住宅は、向かいの棟との距離が狭く、また通路に面しているので、外から部屋の中を見られてしまうことがあります。

入口：

私の部屋はいちばん山側にあつて、窓を開けるとそこは林というか山なのですが、夏の暑い時に網戸のままで寝ていたら、鹿の鳴き声や熊かどうかは分からない動物の息づかいを感じたり、そういうところでは身の危険を感じることがありました。

河津：

平田地区の住民から、栗林の仮設だったら、鈴を鳴らしながら帰らないと熊が出るよと言われました。私は名札に鈴をつけていましたが夏場はビクビクして帰っていました。

それから、壁にすき間が空いていて、窓は閉めているのにそのすき間からコオロギが入ってきたりしていました。

その様なエピソードはありますが長期になるとホテルではくつろげないので、断然仮設の方が良かったと思います。



仮設団地（平田第6仮設）

上村（司会）：

食事の面など、いかがでしょうか。

大庭：

食事が大変なので、賄いつきなどあれば良いのと思います。

加藤：

自炊をしているので、食材のやりくりとか、そういうのを本格的にやってみて、大変だなと思いました。大した料理はしないですが。

上村（司会）：

次にいきます。東北という寒冷地での生活は、寒さや雪への対策など、今までに経験のないものだったと思います。体験談などお聞かせください。

末永：

まだ今年は水道管が凍って水が出ないということはありませんが、去年は2回、朝起きて蛇口をひねると水が出ないということがありました。今年は幸いにまだ凍っていません。

特に気を使っているのはやはり水で、寝る前にヤカンに水を溜めたり、お風呂の水を溜めたままにしたりしています。万が一止まった時でも、トイレの水が使えるのと、顔が洗える程度の水は確保しています。

加藤：

今、私たちが住んでいる仮設住宅の配水管は、仮設管を土手の横に通していましたが、先日、本管が敷設されて切り替えました。ただし、受水タンクの入り口の所が凍る場合もありますので、まだ予断は許しません。

上村（司会）：

寒さという点で何かありませんか。

大庭：

釜石は、雪も大した事はなく、思った以上に寒くないというのが私の印象です

入口：

こちらの方は日が暮れるのが早いので、午後4時半には暮れてくるので3時すぎぐらいに寒くなってきます。現場に行っていると、気温の下がり方が激しくて、体験してみてこんなに違うということが分かりました。

東：

寒さの話もそうですが、2回冬を越すとずいぶん体が慣れてきて、5度ぐらいの気温で暖かいという感じがして、10度になるとすごく暖かいという感じになり、北九州にいる時とずいぶん感覚が変わったということがあります。

それから、日の出、日の入りが早いという話がありましたが、日の出が本当に早く、午前3時台に白んでくる状



釜石の冬 釜石市役所本庁舎

況で、赴任直後は余震もあったので、その両方が相まって、3時台から目が覚めて大変でした。早起きし過ぎて昼間眠かったという記憶があります。

森田：

去年のことですが、雪が降ると地元の方はすぐに雪かきをするのですが、私が住んでいる棟は応援部隊ばかりで、雪かきをしていませんでした。夜になって、雪が残っていたので、お湯を撒いて失敗しました。朝起きるとガチガチに凍っていました。

上村（司会）：

どこに撒いたのですか？

森田：

玄関の所です。溶けたかなと思って次の朝起きると、ガチガチに凍ってそこだけ滑る状態になっていました。今年はそれに慣れて、箒で掃いて凍らないようにする、ということが1年いて慣れたことです。

東：

夜、洗濯物を外に出して、朝起きるとガチガチに凍っていたということもありました。それから、最初はなぜ皆が雪かきを熱心にするのかがよく分からなかったのですが、昼間少し気温が上がって少し太陽が当たると溶け出して夜に凍ります。駐車場はそのままにしておくとガチガチに凍って、車が滑って危ないからなのです。ひと冬経験したので、さすがに今年は駐車場の周りの雪かきをしています。

上村（司会）：

車の運転ですが、雪道の運転講習会もありましたよね。

河津：

雪道の運転が不安で仕方なかったのですが、警察の方が講師になって運転の研修会がありました。釜石市は物損事故が多く、人身事故や死亡事故は少ないけれど、滑ってしまったら運の問題なので、対向車の方に滑れば人身にも死亡事故にもつながるし、そうでなければ物損事故になるという話でした。滑ったら運を天に任せるしかないと言われ、そんなものは任せられないと思い、安全運転に心掛けています。できるだけ雪道の運転はしたくないと思いました。

上村（司会）：

皆さん、実際に運転して滑ったということはあるですか。

入口：

滑ることはあります。ただ、日本の車やタイヤの技術はすごいですね。ちょっと滑ってもリカバーできますし、この冬、4WD のリース車を借りていただいて、とても助かっています。市のFRの公用車で走るとすぐに回転したり、崖から落ちていたりする可能性も無きにしも非ずだと思います。半島部に行くと、まったく雪が溶けません。ですので、ガチガチの所に行くのは、運転の慣れや、車の性能によって、安全の度合いがずいぶん変わってくると思います。

——北九州市と釜石市との関係について——

上村（司会）：

最後のテーマにいきます。北九州市と釜石市との関係についてです。

先日、北九州市と釜石市は鉄の町としての歴史的なつながりや震災支援を通じた交流を踏まえて、連携協力協定を締結しました。今後、両市で様々な分野の連携が図られることが期待されます。

そこで、両市の間で連携や協力が期待される分野や、今後の両市の付き合い方などについて、提案や意見などがあればお聞かせください。

原田：

協定締結の際の誕生祭で販売した缶詰や海産物が大変おいしいと好評の声が続々とありまして、まずは市役所の売店などで売っていただけないかなと強くお勧めしたいです。

末永：

誕生祭には行けませんでした。少し前の農林水産まつりでサンマ焼きを行いました。このようなことを、定期的を実施して、釜石の方を北九州市に招待できるようなイベントができれば良いと思います。

幸いこの農林水産まつりは、来年も釜石からサンマを送っていただけるようですので、そういうイベントに招待できれば良いと思います。

上村：

連携ということですが、せっかくこういう形で協定を結んだので、役所同士で連携するだけでなく、やはり市民同士、企業同士も連携するような仕組みづくりが必要になってくるだろうと思います。

そうすることによって、それぞれの市が活性化するというところをもう少し考えていく方が良いと思います。



釜石市の魚市場

大庭：

交流の一つの例として、昨年8月に私の上の子（小学校二年生）が一人で釜石に来ましたが、その時に、小学校の授業の一環として、1クラスまるごと来られたら良いなと感じました。実際に、津波のときは逃げろという釜石の教訓をじかに見てもらうことは良いと思います。

東：

スポーツでも作文でも良いですが、子どもたちの交流をもう少しできれば良いなと思います。また、他の都市とは人事交流もやっているの、その辺も将来的には考えていくべきかと思います。というのも、私たちはこっちに来て、少ない人数で何でもやっている姿を見て、頑張れば自分たちも何でもできるんじゃないかと思うことがあります。一方、釜石市の職員が政令市のスピード感であるとか、その辺を体感するというのは、お互いの都市で職員同士のスキルを上げるためにも良いのではないかと思います。

釜石はもともと省庁派遣も行っており、他の組織で腕を磨くという経験もしているので、そういう場を提供するのも一つの方法だと思います。

——まとめ——

上村（司会）：

ありがとうございました。

では、最後に、この1年を振り返っての感想や釜石復興に対する思いを、一言ずついただいて、終わりにしたいと思います。

**森田：**

この1年というか1年半になりますが、先ほどもあったように、復興が進んでないと言われているのですが、一つずつ進んでいますので、来年度になれば少しずつ現場も動き出します。来年度はさらに復興が進んで欲しいと思っています。

入口：

昨年の2月、3月にこちらに派遣されることが決まり、用地買収の担当と言われましたが、たぶん私のスキルが必要になるのは来年の4月からだろうなと思っていたら、だいたいそれくらいになってきました。

ようやく本番を迎えるところに来ていますので、引き続きバックアップできることは頑張っていこうと思っています。

小野：

私が担当している漁港は、今年1年は計画どおりに復旧が進んだと思います。今年度で船が停泊できるようになり、次年度に安全に止められるようになって、3年程度で完全復旧できるように計画どおり進んでいけば良いなと思っています。



末永：

もうすぐ震災から2年になりますが、だんだん忘れ去られているのかなという感じがします。そこで、忘れられないようにするためにも、できれば北九州市の職員も、業務の一環として一度は現地を見て欲しい、そして、どこか心の中に残して欲しいと思います。

加藤：

水道の職員として、復興に関しては微力ながら貢献できたと思っています。

水道という特性上、表舞台には出ることはありませんが、まず道路ができ上がらないと工事にかかれないう面もあります。少しずつではあるけれども、復興が進んでいるのではないかと思います。

これからも焦らずにやっていければと思っています。



原田：

1年を振り返っての感想は、前半は慣れるのに気力、体力を使い、後半は慣れてきて、事業を進めたくても進められないと、皆、同じ気持ちだと思いますけど、そういう感想でした。

これからは、住民の方になるべく不安を与えないように何とかしたいです。

河津：

私は釜石に着任して、住民の方々や釜石市の保健師さんなどからとても温かく迎えていただいて、本当に感謝しています。

また、被災地の業務というのは、誰でもできることではないので、とても貴重な体験をさせてもらったと、これは私自身の財産になったと思っており、この機会をいただけたことに感謝しています。

被災地の皆さんは住民も、保健師も、被災して2年経ちますが、この間ずっと走り続けていて、疲れているのですが休むことができない、ずっと頑張っていて疲弊しているところが垣間見えますので、ぜ

ひ、セルフケアしていただきたいと思います。職員が疲れているとそれが住民に跳ね返ってきますので、特に職員はセルフケアをしていただきたいと思います。こんなにみんな頑張っているのだから、ぜひこれが報われて欲しいと思っています。

上村：

今年1年ということで仕事をさせていただいたわけですが、私の業務である都市計画の関係で、大きな復興事業の計画については、計画決定というところまでは終わるのかなと思っています。

今後はそれらをもとに具体の事業に入っていくと思いますが、自分が携わった仕事が今後どういう形になっていったか、最終的には見てみたいという思いがあります。復興が何年かかるか分かりませんが、10年後釜石を訪れて、自分がやった仕事がどういうふうになったのかを、また見てみたいと思っています。

大庭：

私が担当している区画整理事業が、3月に県から事業認可を取得して今年の秋ごろにいよいよ工事に着手するという段取りになっています。現在、事業の狭間というか手続きの作業中でして、現段階で帰任するのは中途半端なことから、残留希望を出しました。今年の秋以降、目に見える形で復興事業に着手出来れば、ひとつの区切りとなりますので、帰任できます。

上村：

東課長、最後をお願いします。

東：

今年度は残り1ヶ月以上ありますが、まずはここにいる皆さんが釜石で働いてくれたことに感謝します。

それから、何も問題が起きなかったこと、それがマネジメントする者として、本当にありがたいことだと思います。

特にご家族を北九州に残して、寒い北国で働くのは、皆さんそれぞれに苦勞していただろうなと感じますので、ただ感謝、感謝です。



私自身1年半以上になって、ずいぶんこちらで友人ができて、本当に貴重な経験をさせてもらっていると思います。まだこれからどうなるか分かりませんが、少しでも早く住民が元の生活に戻れるように、まだまだいろいろな形で頑張っていきたいなと思っています。

上村（司会）：

皆さんの活躍は日頃から聞いていますが、改めて、本市を代表して釜石の復興に向け頑張っていたことが感じられる座談会でした。

来年度も釜石市への職員派遣は継続します。この中には、来年度も引き続き頑張ってください方もいますが、今後も引き続き、北九州市をあげて釜石市の復興支援に取り組んでいきたいと思います。本日はありがとうございました。

